

満州からの引揚げ体験

しかもとたかやす
鹿本高保さん

私は、大正 15 年 7 月 20 日生まれなので、満 89 歳になります。

旧制の魚津中学、今の魚津高校を昭和 19 年に卒業して満州の撫順にある満鉄に勤めました。70 年前の満州には油部頁岩という油を含んだ岩が多くありました。島国の日本にとって石油一滴は血の一滴と言われるほど、大切なものでした。私は、満州にある潤滑油を作る工場の建設に係わっていたのです。日本国民は、数え年 20 歳になると、身体検査を受けて兵隊に行く義務がありましたが、日本の戦況が悪化してきたためか、当時 19 歳の私も兵隊に行くことになりました。昭和 19 年に撫順へ行き、兵隊検査を受けて、昭和 20 年の 7 月初旬に軍隊に来るように言われました。

錦州へ入隊することになり、万里の長城が始まる山海関という所に配属されましたが、その翌月の 8 月 15 日に戦争が終戦を迎えました。兵士として戦う前に捕虜となり、遼陽において自分の鉄砲とか銃剣を返す、いわゆる武装解除をしてから海城の捕虜収容所に行ったわけです。

収容所では何も仕事がなく、私たち少年兵は、新兵なので掃除をしたり食事の用意をしたりという仕事をしていました。そのうちに、内地に帰れるかもしれないが、あるいはシベリアかどこへ連れて行かれるかもしれないと不安な気持ちで収容所の辛い日々を送っていました。収容所には、30 代の満州で税関に勤めている人や事業をしている人など、色んな人がおられました。そういう人達は、家族のことを思って、収容所から脱走して、夜に逃げ

出していなくなりました。当時は、脱走といったら軍隊では一番悪い罪で、捕まったらすぐ銃殺されるくらいのことだったんです。日本の国は絶対負けないとか神風が吹くとかそういう風に考える軍国少年だったので、脱走は良くないことだと思っていました。

私たち捕虜6人は、サンカイカンという所に入りましたが、大学を卒業し、満州で事業を営んでいる私より二つか三つ年上の方が、「日本の国は負けて軍隊の規律もなくなったし、家族の事も心配だ。我々もここにおいて、どうなるか分からない。もしよかったら私が面倒見るからやっぱり我々も一緒に逃げようや。」と言われました。

6人のうち2人はどうしても脱走は絶対にできないと言って残られましたが、私たちは月夜の晩、夜の暗闇に紛れて収容所を逃げだしましたが、地理が分からなかったので、ただむやみに歩き、大きい道路に沿って北の方に向かって歩いていました。ずいぶん歩いて疲れたから穀物のコーリャン畑で休んでいると、そこへソビエトの兵隊がトラックに乗ってやってきました。もし、我々が歩いていたら月夜の光に照らされて、バラバラッと銃で撃たれてやられていたかもしれません。これは危ないということで、その場から動かずに少し明るくなってきたら、運よく鉄道の線路が近くにあったので、それに沿って行けば、どこか駅に着くからと線路を辿って歩いていくと、すぐそばに駅が見えました。急いでそこへ行ったら、駅員はみんな日本人で、事情を話すと「わかりました。軍服は危ないから脱いで満鉄の作業服を着なさい。満鉄の職員たちみたいなロシア語で書く腕章も作りますので、それをして行きなさい。」って言うてくれました。

当時、汽車はシンヨウとかチョウシンとか南の方から北の方へ向かう鉄道が時間は不定期やったけど何本かありました。それでその汽車に乗って、シンヨウに向けて行ったわけです。シンヨウの一つ手前にある貨物専門の大きなサハドンという駅に汽車が停まって、20分30分経っても動きません。

どうしたもんかなあと思っていると、なにげなく「撫順へ行くもんおらんか。撫順へ行くもんおらんか。」っていう声が聞こえてきます。

見てみると、ひとりの日本人が「撫順へ行くもんおらんか。」と言っています。実は私は撫順の製油会社に勤めているときに兵隊になりましたので、撫順に知り合いがたくさんいます。その人は「あんた撫順に帰りたいがなら、わしと一緒に前の機関車に乗って、なにもせんでいいから私と一緒におってくれ。貨物専門の線路で行くから途中ひとつも心配ないから、あんたどんだけでも連れていくぞ。」とおっしゃいました。

そこで一緒にいた4人の人に「実はわし撫順におったから撫順へ行きます。」と伝えると、みんなは「ああ、そうしられ。無事に着くよう祈っとる。」と言って、そこで別れました。

私は、撫順に行く人おらんかって言った人の横に座って、貨物列車に乗って撫順へ向かいました。無事に撫順に着くと東京工業大学出の九州の都城出身の私の上司が信仰深いクリスチャンだったために「やあ鹿本君、よく帰ってきた。いかったな。」って言うてくれました。今は新日本製鉄の八幡製鉄

の重役の娘さんだった奥さんもクリスチャンでしたので、そのまま家に泊めてもらい、あくる日から満鉄の職員として元勤めていた会社に勤務することになりました。住むところは、満鉄の社員が住む水洗便所もある立派な社

宅でした。社宅の隣に住む奥さんは、ご主人が召集を受けて 30 代で兵隊に行かれたので、一人で子供と留守を守っておられたけど、衛生状態が悪くて伝染病の発疹チフスに罹ってしまわれた。そうしたら我々若い者は看病に行って世話をするように言われたので、看病に行ったら私も発疹チフスがうつってしまいました。もうだめかと思いましたが、若かったからか医者にもかからず治り本当にホッとしました。発疹チフスが流行り、亡くなった人を山へ運んで木を切って火葬する手伝いもした事あるし、今では考えられないような事をしてきました。

撫順には、朝鮮やハルピンなどいろんな所から、たくさん避難してこられました。日本人の比率も多く治安状態がよくて、とってもいい所でした。我々は本当に恵まれていたと思いますが、北満の牡丹江に日本から開拓に来ている人たちは親子離れ離れになったり、途中で赤ん坊が死んだりと筆舌に堪えないようなご苦勞をされたようです。開拓の人と一緒に仕事した時のことです。ただ立つとるだけでスコップを持ったまま仕事をされないので「どうしたんけ？」と聞いたら、「食事が一日一回しか食べられんもんやから栄養失調になったみたいで力がでない」と言われました。

悲惨な事も見たり聞いたりしたもんだから、とにかく戦争は絶対にしてはならないと思っています。当時は、軍国主義で国のために尽くす、命を投げるのが当たり前…だから我々より年配の者は兵隊に行って亡くなった者が何人もおられました。戦争は、勝った国も負けた国もどちらも辛い思いをすることになるので、話し合いをして二度と戦争はしてはなりません。